

黒龍江省産米は 日本稲作にとって脅威か？

吉備国際大学 加古 敏之

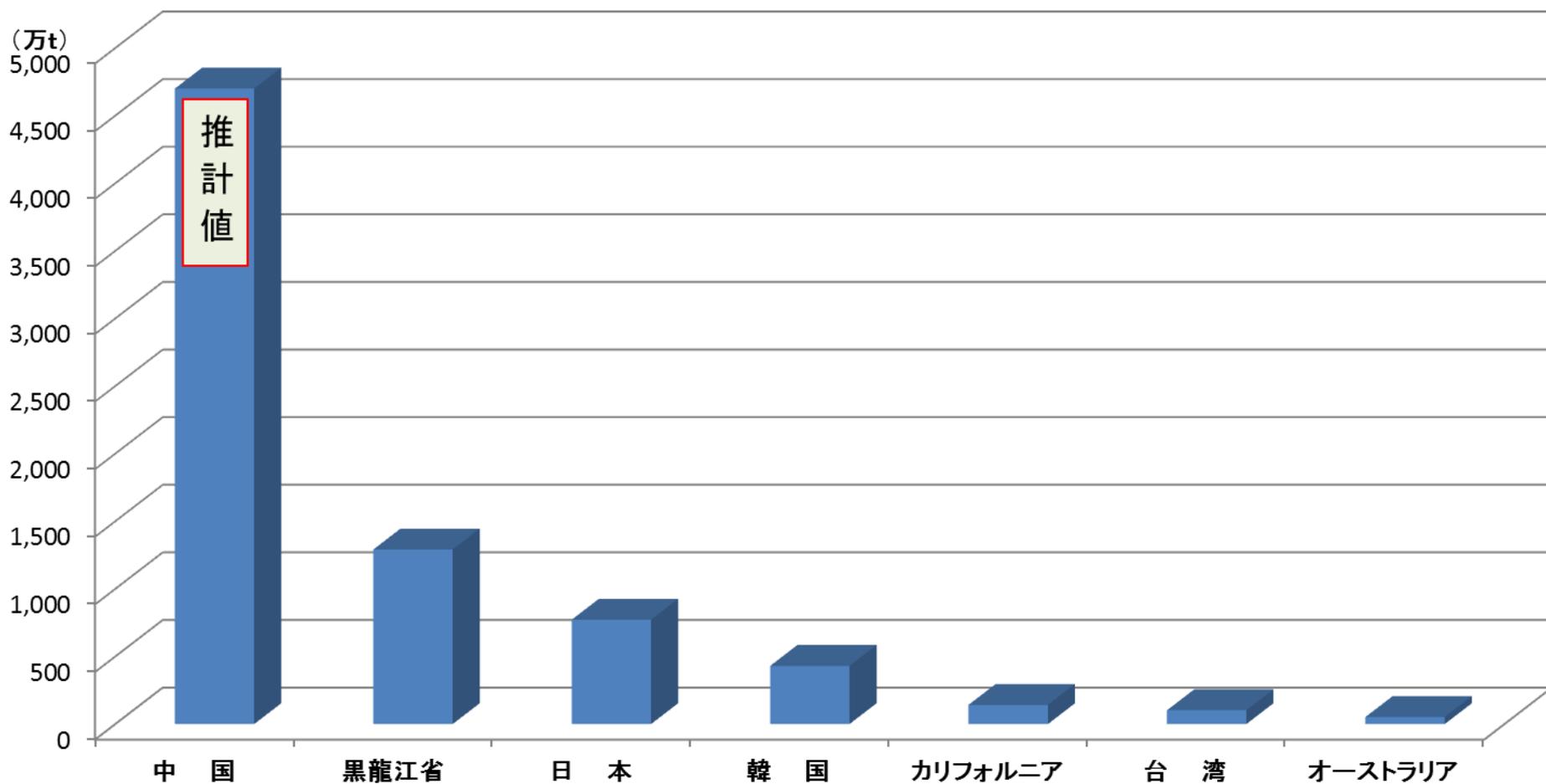
中国におけるジャポニカ米生産

- 中国は世界一の人口大国であり、世界一のコメ生産・消費大国でもある。2013年には中国は世界のコメ生産量の30%、消費量の31%を占め、その期末在庫量は世界全体の期末在庫量の43%に相当する。
- 世界の米貿易量は中国のコメ消費量の28%にしかすぎず、不作の際に薄いコメ市場に依存することは食糧安全保障上大きなリスクを伴うため、これまではコメの自給化政策を堅持してきた。世界の米貿易に占める中国のシェアは輸出量では0.01%、輸入量は8.4%を占めているに過ぎない。今後も、2020年まではコメの自給化政策を維持することを表明している。
- 中国ではインディカ米とジャポニカ米の両方が生産されているが、インディカ米の方が生産量が多い。しかし高度経済成長に伴う所得の増加の下で、大都会の富裕層を中心にジャポニカ米の消費量が増加しており、生産量も東北3省を中心に増加している。ジャポニカ米の生産量に関する公式のデータは発表されていないので、正確な生産量は把握できない。

- ジャポニカ米の主要産地は、黒龍江省、遼寧省、吉林省の北方産地と、江蘇省、浙江省、安徽省の南方産地がある。北方産地ではコメ生産量の大部分はジャポニカ米であるが南方産地ではどのくらいの割合がジャポニカ米であるかは不明。
- 北方産地と南方産地の6省のコメが全てジャポニカ米と仮定すると約4千万t(2010年, 精米換算)となる。これら6省以外にもジャポニカ米は生産されている
- 中国のジャポニカ米産地の中で生産量が最も多いのは黒龍江省であり、2012年には日本の1.9倍の1,628万t(玄米換算)を生産した。
- ジャポニカ米は中国、日本、韓国、台湾、米国、オーストラリア等でも生産されているが、中国のジャポニカ米生産量が群を抜いて多い。中国の中でも、黒龍江省のジャポニカ米生産量は日本、韓国、台湾、米国、オーストラリア等と比べ高い水準にある。



図 2010年におけるジャポニカ米生産量の推定値(精米)



注1)カリフォルニアは短・中粒種の合計。

2) 中国は、黒龍江省、吉林省、遼寧省、江蘇省、安徽省、浙江省のコメ生産量の合計。江蘇省、安徽省、浙江省のコメは全てジャポニカ米と仮定しているため過大評価となっている。

資料) USDA: PS&D Online, March 2011, 中華人民共和国国家統計局編『中国統計年鑑』2011。

黒龍江省における稲作の発展について考察する意義

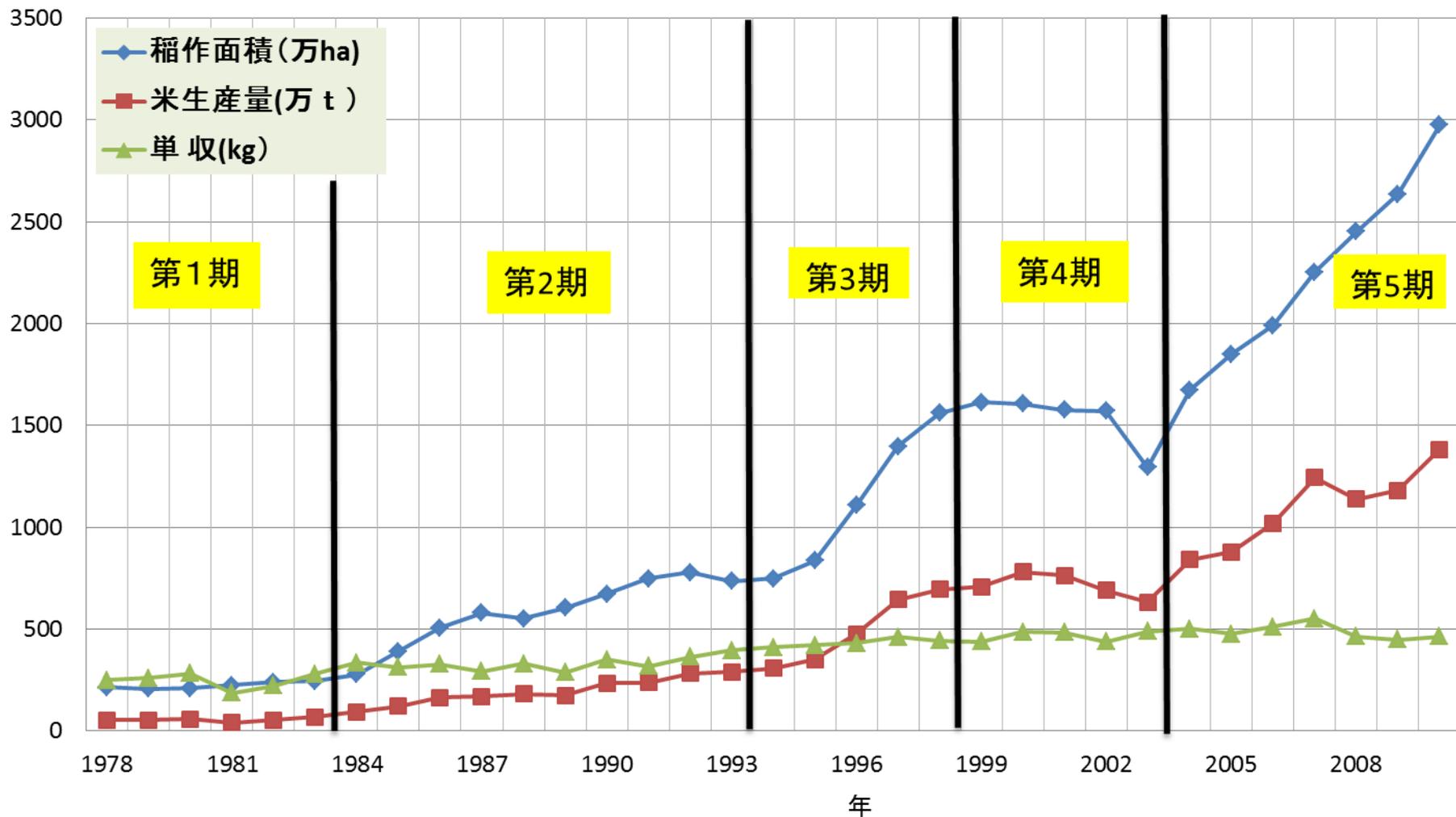
- 黒龍江省はジャポニカ米の生産量が中国で一番多いのみならず、生産拡大の速度も他の省と比べて格段に速く、中国におけるジャポニカ米生産発展の中心地域である。今後も生産拡大の余地はある。
- 黒龍江省では、日本から移転されたコメの品種や寒冷地稲作技術を用いて大規模稲作経営が行われている。稲作農民の経営規模拡大意欲は強く、若い農業従事者が存在する。
- コメ1kg当たり農家庭先価格は日本の1/4程度。小売価格は日本の1/4から1/6と低い。
- 黒龍江省産米はSBS米として日本に輸出されている。日本のコメの関税率の引き下げやMA米の輸入枠が拡大すれば、日本への黒龍江省産米の輸出が拡大する可能性がある。

中国の食糧政策と黒龍江省のコメ生産

- 黒龍江省におけるコメ生産は中央政府の政策に大きく影響されながら生産量を増加させてきた。
- 1994年の不作で食糧不足に直面したため1994年以降食糧の保護価格(契約価格)を40~50%上げた。米価上昇、利潤増加で、黒龍江省ではコメ生産が大幅に増加した。
- 高度経済成長に伴う農工間所得格差の拡大への対策として、農民の所得を拡大する保護政策が2004年に導入された。13の食糧主要産地における食糧生産農民の所得を増加させる保護政策の一つとして最低買付価格を引き上げた。この結果、ムー(6.7アール)当たり稲作利潤が史上最高へと増加したため稲作面積が大幅に拡大して、コメ生産が増加した。

図1 黒龍江省のコメ生産量, 稲作面積, 単収(玄米)

(千ha, 万t, kg)



資料: 黒龍江省統計局『黒龍江統計年鑑』各年版

表 黒龍江省における期間別にみた米生産量、稲作面積、単収の
年平均増加率と、米生産量増加に対する稲作面積と単収の貢献度

期 間	米生産量	稲作面積	単 収	稲作面積 貢献度	単 収 貢献度
第1期:1978-1983年	4.9%	2.7%	2.2%	55.5%	44.5%
第2期:1984-1993年	12.7%	10.8%	1.8%	85.4%	14.6%
第3期:1994-1999年	16.7%	15.4%	1.3%	92.4%	7.6%
第4期:2000-2003年	-7.1%	-7.2%	0.1%	101.3%	-1.3%
第5期:2004-2010年	8.3%	9.6%	-1.3%	115.2%	-15.2%
1978-2010年	10.2%	8.2%	1.9%	81.0%	19.0%

注1) 単収は米生産量を稲作面積で除して求めた。

- 2) コメ生産量の成長率, 稲作面積の成長率, 単収の成長率の間には $G(Y) = G(A) + G(q)$ という関係がある. ここで G は成長率, Y はコメ生産量, A は稲作面積, q は単収を表す. 両辺に100を掛け, 両辺を $G(Y)$ で除すと $100 = G(A) * 100 / G(Y) + G(q) * 100 / G(Y)$ となる. 右辺第1項はコメ生産量の成長率に対する稲作面積の貢献, 第2項は単収の貢献を表す.

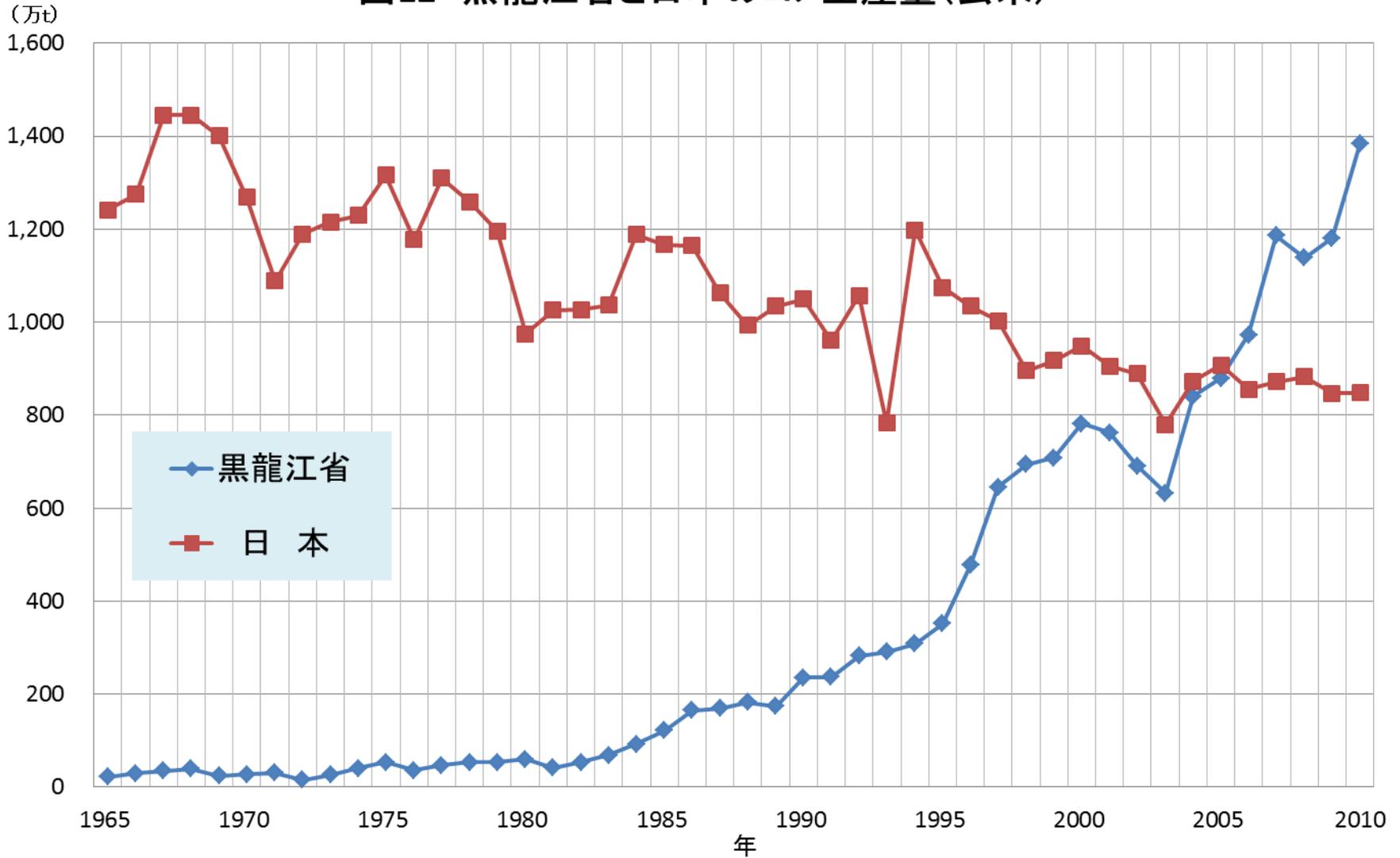
資料: 黒龍江省統計局「黒龍江統計年鑑」各年版

表 2010年の黒龍江省における緑色米

	面積(万ha)	生産量(万t)
A 級	146.4	978.4
有機米	5.7	32.3

資料) 中華人民共和国国家統計局編『中国統計年鑑』各年版

図12 黒龍江省と日本のコメ生産量(玄米)



三江平原の稲作農家からの聞き取り調査結果

- 黒龍江省・三江平原における稲作経営の実態と稲作経営に対する農家の意向を把握する目的で、2011年に100戸の稲作農家から聞き取り調査を実施。
- 2005年の農家1戸当たり平均水田面積6.9ha、最大水田面積は22.0haであったが、5年後の2010年における平均水田面積は13.1ha、最大水田面積は34haであった。この5年間に平均水田面積は88%拡大した。新たに水田化できる土地も存在するため、今後も稲作面積の拡大が予想される。
- 水田の団地数は、49%の農家では1団地、51%の農家では複数の団地であったが、複数の団地の場合でも、2ないし3団地が多い。
- 2010年の10a当たり平均玄米単収は594.5kgで日本の単収522kgよりも14%高い水準であった。
- 大部分の農家は引水灌漑と地下水灌漑の両方を利用している。

- 最も多くの農家(89%)が栽培している稲の品種は、日本の北海道で育成された空育131であり、ついで星金稻6を28.3%の農家が栽培していた。
- 稲作農家のコメの平均粗収益は336万円であった。コメの最高粗収益は920万円, 最少粗収益は15万円であった。
- 農業経営に関する満足度を尋ねたところ, 「ほぼ満足」が84%, 「大変満足」が4%であり, 両者の合計88%という高い割合の農家は農業経営に満足していた。
- 農業経営上の問題点としては(複数回答), 農産物価格が不安定が67.7%と一番多く, 次いで生産資材の価格が高い46.5%, 農産物の価格が安い42.4%, 農作業の委託料が高い42.4%という回答が高い割合を占めて。

日本と黒龍江省のコメ生産費の比較

	黒龍江省	日本
玄米生産量(kg/10a)	549	511
玄米価格(円/kg)	48	186
総収入(円/10a)	26,169	94,792
総費用(円/10a)	17,375	141,526
自家労働費(円)	1,040	34,452
雇用労働費(円)	1,599	2,329
自作地地代(円)	1,677	12,250
所得(円/10a)	12,870	6,557
労働日数(時間/10a)	45.6	26.4
労働生産性(kg/日)	96	155
注1) 国家発展改革委員会価格司編著『全国農産品コスト収益資料編』2011年度。農林水産省。統計情報部『平成22年産米及び麦類の生産費』。		
2) 粳1kg当たり玄米0.75kgで計算。		
3) 1元=13円で換算。		

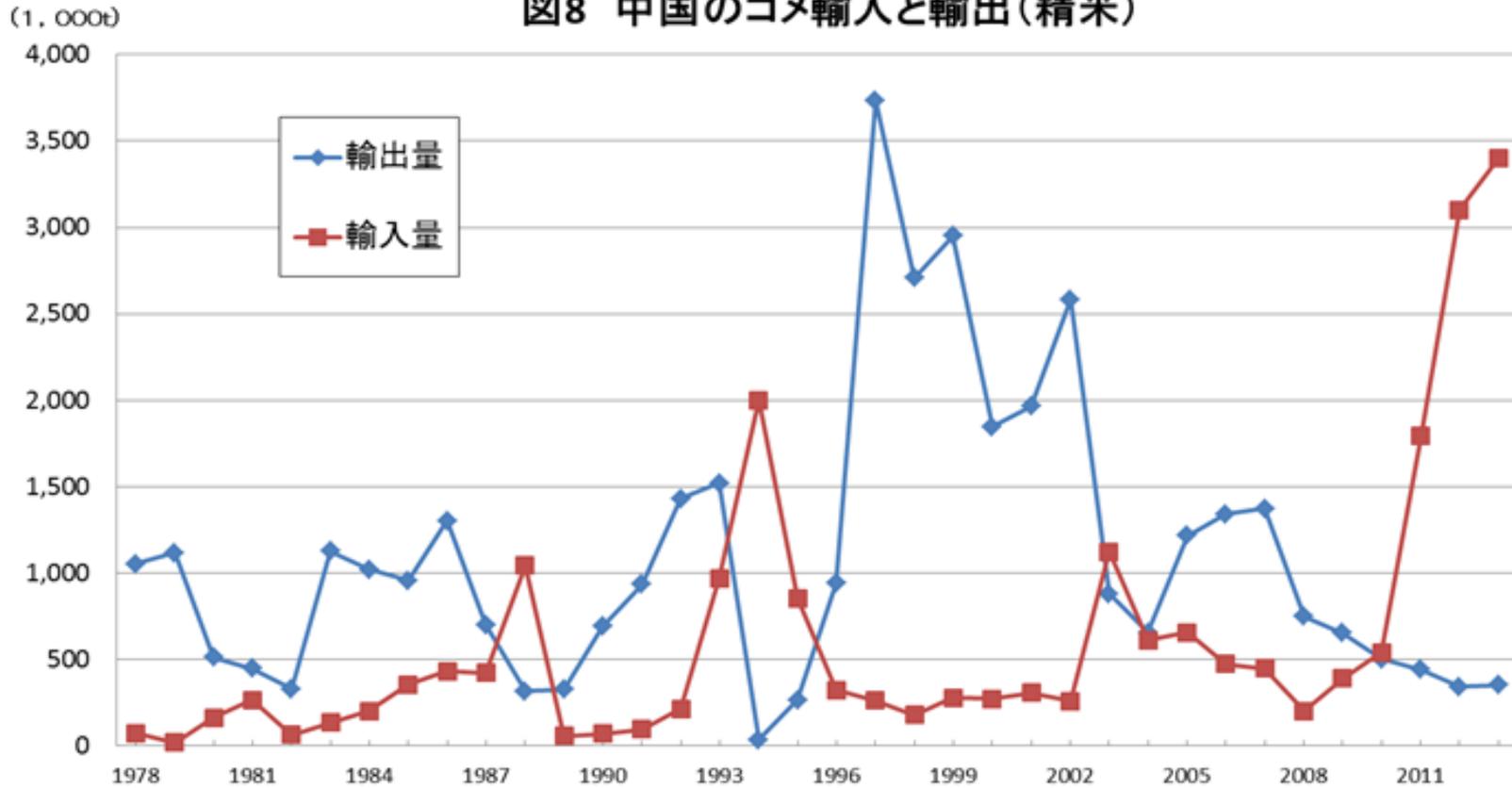
黒龍江省農墾区におけるコメ生産拡大の可能性

- 国や省政府によるダムや水路建設への投資が増加してきたため、河川や湖の地表水を灌漑用水として利用することが容易になった。
- 農墾区内には農業生産に利用可能な土地はまだ47.6万haある。今後も稲作面積の拡大の可能性が大きく、コメ生産増加の潜在的な可能性を持った地域といえる。

中国のコメ輸出政策

- 2001年のWTO加盟後、中国は『貨物輸出入管理条例』を公布し、経済と国民生活に深く関わる一部貨物の輸出入に対して国営貿易管理を実施して、量的な輸出規制を行っている。
- コメについては国家発展改革委員会が食糧安全保障の維持や国内米価の安定などの目的で、輸出割当総量を設定している。
- コメ輸出を行う中央管轄企業は商務部に申請して輸出割当許可証を取得することが必要とされ、許可証なしには通関や検疫検査ができない。
- コメの輸出割当は中国食糧食用油食品輸出入有限会社と吉林食糧グループ輸出入会社だけに与えられている。これまで食糧安全保障の維持や国内米価の安定の視点からコメ貿易が管理されてきたが、今後も中国は引き続き自給自足の維持を優先すると予想される。

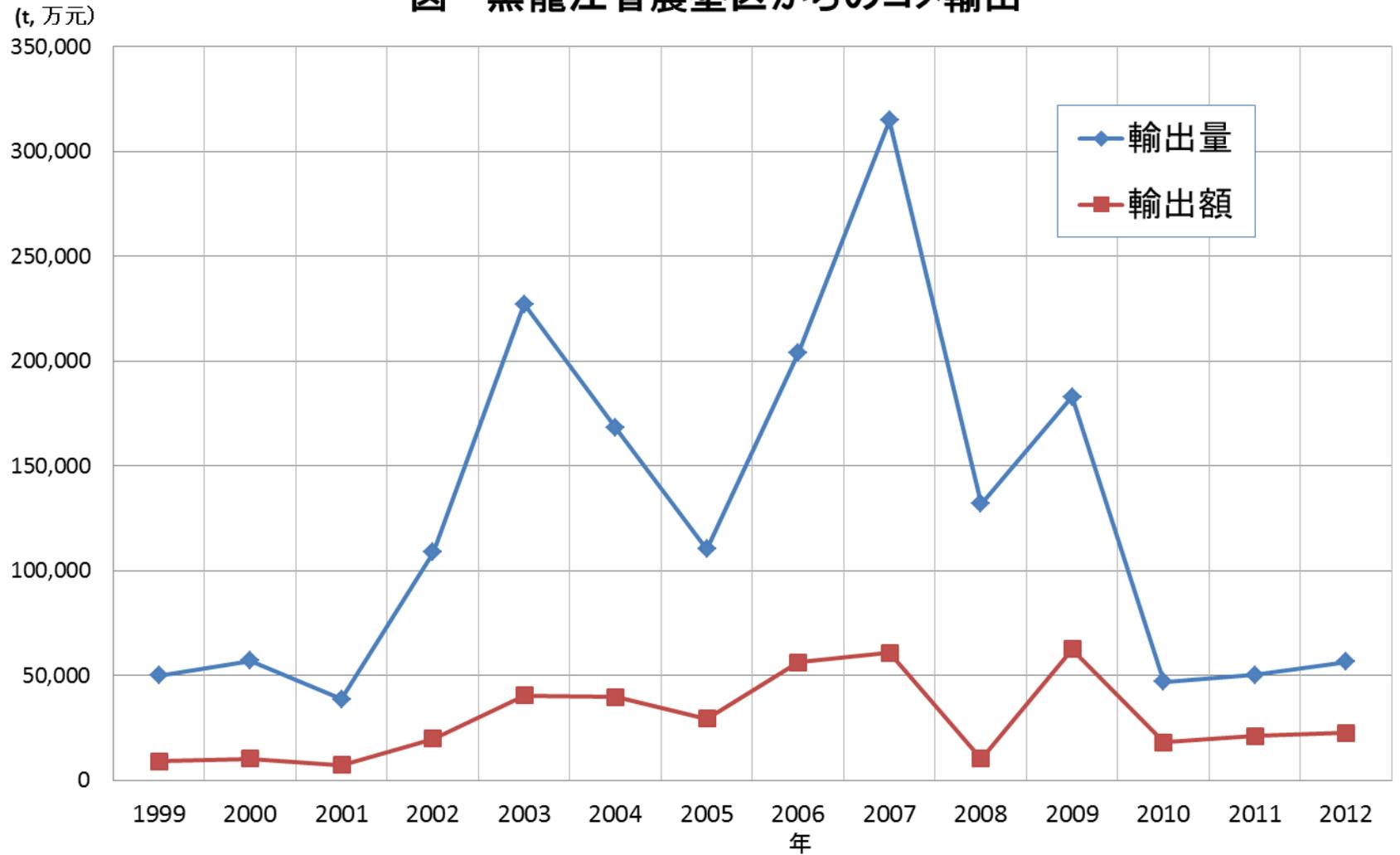
図8 中国のコメ輸入と輸出(精米)



Source: S. Ito: World Food Statistics and Graphics (<http://worldfood.apionet.or.jp>) Tottori University, Japan March/ 2014.
(Original sources are from ERS/USDA: PS&D Online. March 2014)

国家発展委員会が食糧安全保障や国内米価の安定などに配慮して輸出割り当て総量を設定する。

図 黒龍江省農墾区からのコメ輸出



注) 黒龍江省農墾総局統計局、国家統計局黒龍江農墾調査隊編『黒龍江墾区統計年鑑』各年版.

中国の食料安全保障政策

2008年に国務院常務会議で採択された「国家食糧安全中長期計画綱要(2008～2020年)」では、2020年までの目標として、

(ア)食糧自給率95%以上を堅持。

(イ) 耕地面積1億2,000万ha以上、穀物作付面積8,400万ha、
コメの作付面積3,000万haを確保。

(ウ) 5億4千万t以上の食糧生産能力を(うち、穀物4億7500万t以上)堅持する。

日本のコメ輸入

- 日本のコメ輸入は関税化されており、778%の関税を払えば輸入可能。しかしこうした高関税を支払って輸入されるコメは年間100t前後。
- 2000年以降76.7万tのMA米が輸入されてきた。その内10万tがSBS米で、残りがMA一般米。MA一般米では米国とタイが大きなシェアを占めており、中国は皆無。MA一般米の用途は加工向けが多く、援助米、エサ米としても用いられる。SBS米では中国が6～7割と一番大きなシェアを占めてきた。SBS米はMA一般米と比べ品質が高く、主食用に用いられる。SBS米は2009年までは年間10万t輸入されてきたが、2010年10月から米・トレーサビリティ法が導入され、取引記録の作成・保存が義務化されたため、輸入米が敬遠され、輸入量は3万7千tへと減少した。特に中国からの輸入は大幅に減少した。しかし、2011年の東日本大震災の発生による福島原子力発電所の事故によるコメの放射能セシウム汚染問題のため、安全な国産米の集荷が不安となり、SBS米輸入が10万tへと回復した。
- 中国から輸入されるSBS米のほぼ全量が短粒種で、日本産米とブレンドしやすく、品質も日本の卸売業者から一定の評価を得ている。これらのコメの多くは黒龍江省を中心とするジャポニカ米の北方産地で生産されている。

表 日本の中国からのSBS米の輸入

年 度	輸 入 量
2005年	74,484t
2006年	67,198t
2007年	72,740t
2008年	63,790t
2009年	63,635t
2010年	2,936t
2011年	50,460t
2012年	27,640t

黒龍江省産米は日本稲作にとって脅威か？

黒龍江省におけるコメ生産量は今後も増加して、コメの余剰量(供給量－需要量)も増加すると予想される。黒龍江省産米は日本産米とブレンドしやすく価格競争力もあるので、中食、外食での需要があり、日本のSBS米輸入で大きなシェアを占めてきた。今後も日本のコメ消費では中食、外食でのコメ消費割合が増加すると予想されるので、黒龍江省産米に対する潜在的な需要は増加すると思われる。日本のSBSの輸入枠が拡大されたり、コメの関税率が大幅に引き下げられれば黒龍江省産米の輸入は増加すると予想される。ただし、この輸入増加は「国家食糧安全中長期計画綱要」で述べられている、食糧自給率95%以上を堅持するという目標が達成されていることが前提となる。